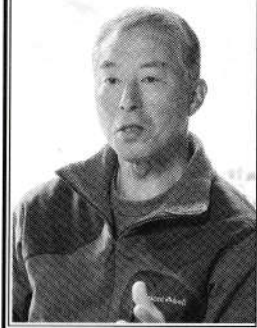


敗退するグローバリスト

熊野飛鳥むすびの里代表 荒谷 卓



ヤルタ体制というグローバリズム体制

—— 本年は戦後八十年となりますが、戦後体制の問題点についてどうお考えになられていますか。

荒谷 戦後体制の問題は、日本に限ったものではないということが重要です。第二次世界大戦終盤、ヤルタでルーズベルト、チャーチル、スターリンが会談し、大戦後の国際体制が協議されました。ヤルタ会談によって、戦後の世界はアメリカ・イギリス・ソ連を中心として世界を分割し、それぞれの既得権を保障するために国際連合が設立されました。しかし、すぐに英米とソ連が対立する冷戦構造となります。グローバル資本主義とグローバル共産主義の対立、これがグローバル国際体制の根源となっています。グローバル国際

体制の発想は、各国の伝統文化・価値観を否定し、世界が一つルールによって管理されることを称揚する思想です。

西側諸国では、共産主義のグローバル的性質のみを強調していましたが、実は、英米が進める資本主義体制こそが、植民地主義を継承する最も悪質なグローバル体制だったわけです。

冷戦下、アメリカは、日本の統治管理方針を変更し、経済援助を餌に日本を対ソ戦略の為に利用することにしました。軍事的には、日本に再軍備させることで欧州正面において優勢だったソ連の軍事力を極東正面に転用配備させ、経済的には、日本の経済成長によって東西経済競争に勝利したわけです。

本来、英米グローバリストは、日本を最初から徹底的に管理したかったのですが、冷戦に勝つために日本に自主裁量を認めてきた面がありました。その結果、戦後日本は日本的な経済活動を行うことは容認されてきた面があります。ですから、日本人にとっては、戦後体制は良い体制ではないかという錯覚が生じてしましました。高度経済成長などを経て、日本は新しい良い国に生まれ変わったのだという意識があったのだと思います。それが、冷戦が終結するや否や、占領下に仕込まれたグローバルガバナンスの基盤が影響を与え始め、それ以降は完全にグローバルガバナンスの体制下に入っていくという形態を取って現在に至っていると思います。少なくとも伝統的日本は、日米関係によって破壊されてきました。

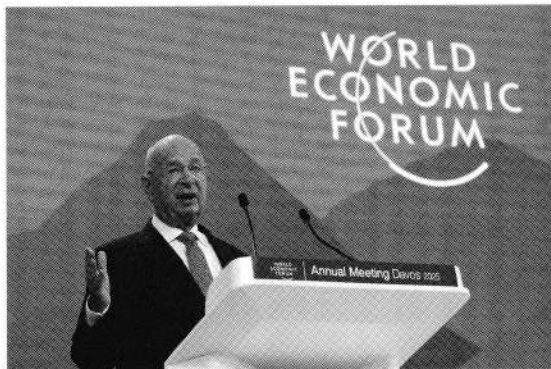
こうした認識を踏まえて私自身の歩みを振り返りますと、私は冷戦下においても自衛官として日本の伝統的価値観が喪失されていることに非常に危機感を持っていました。ただ、今から振り返れば、行政、立法、司法すべてが国民の手からグローバリストの手に渡っているということに関しては認識が甘く、既存の防衛

体制の不備を修繕していくことで事態は改善しようと考えていました。そこで自衛官時代は防衛行政に関わりながら制度の改善に努めていたわけですが、冷戦終了後にグローバルガバナンスの力が一気に顕在化して、戦後体制の内部からの改革というのは難しいという認識に至りました。

自衛隊の前身である警察予備隊は、米軍から、「君たちは新たな民主主義国の軍人である。間違った天皇の軍隊などではない」という調子で、反天皇、反日本の精神とともに米軍式の訓練方式がとられました。そう考えると、自衛隊の原点は占領米軍で、反天皇、反日本のために作られたともいえます。

—— 戦後体制の内部からの改革ができないと一番実感されたことは何でしょうか。

荒谷 私は防衛行政を担う立場から、政治家にさまざまな情報提供や、日本の防衛のあり方を考える勉強会などに関わってきました。しかしそうしたことがまったく何の政治的な動きにもつながらなかったのです。私が情報提供したり勉強会に参加した人物の中から、総理大臣や防衛大臣なども輩出していますが、政



政治的影響力を与えることはできませんでした。戦後体制の浸透ぶりは、当初予想していたよりも相当深刻だったのです。

——有力政治家や大臣になっても、戦後体制の見直しの方向には物事がまったく動かない、下手をすれば政治生命が断たれる現実に直面したわけですね。

荒谷 はい。そういう現状にぶち当たったわけですね。私は自衛官時代の最後には、安倍内閣の集団的自衛権の問題にも関わりましたが、結局世の人が安倍さんに期待するような現実とは全くなく、どこからか要請されて決まっている結論に理由付けをしていく、という仕組みになっていくわけです。この有識者会議等で主要な政策がどんどん決められていく傾向は、橋本内閣頃から顕著になってきたと思いますが、それ自体が公議輿論の軽視ですよ。国会ではなくて少数の有識者でミーティングをして決まってしまうわけです。

しかもそれはあらかじめ結論があつて、あとはその答えをどう着飾るか、体裁を整えるかということではないのです。そしてこれは大なり小なり先進国では同様の光景であり、公議輿論、民主主義が機能するな

だつたり操られたりしている人が配置され、少数の反対意見の委員がガス抜きに配置される場合もあります。必ず半数以上がグローバリストの意向を汲んだ人で構成されるわけです。だから少数者の反対意見はガス抜きとして記録されるにすぎず、まったく反映されないわけです。

——年次改革要望書は1990年代から始まって、

民主党政権になって一旦廃止されますが、やはりその間、かなりグローバリストの意向に沿った要求を日本政府がやるを得ない状況を作ったということなのでしょう。

荒谷 年次改革要望書だけがツールではありません。さまざまな系統があつて、

どという教科書的な現実はどこにもなくて、グローバリストの意向を汲んだ政策だけが進められるというのが現実なのです。

指示はどこからやってくるのか

——竹中平蔵氏に代表されるようなグローバリストが有識者会議を牛耳っていることが問題ということでしょうか。

荒谷 竹中平蔵氏のような世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議に直結する人からの指示という場合もあるでしょうし、日米合同委員会からの要請（指示）ということもあります。日米合同委員会と官僚機構の関係は、GHQ占領体制が現在でも事実上継続しているということです。在日米軍の指示に基づいて日本の行政が動いているのですから。

それ以外にもいくつかあるわけですが、いずれにしても、現在の日本の重要な意思決定というのは、ほぼこうしたグローバリストの意向に基づくものと言えます。

まず有識者会議の座長がグローバリストそのもの

いずれにしてもそうした米グローバリストの意向をくむことが官僚の常識として定着しているわけです。逆らったところでモノにならないし出世も出来ない。下手なことをすると命まで失しいかねないわけです。ですから、もし本当にグローバリストが作った戦後体制を変えようと思うなら、行政、立法、司法に至るまで全体を転換するしかありません。日本の場合にはアメリカ以上にこの負の影響は深刻だと思います。

——防衛面では、グローバリストの影響というのは、主にアメリカから来るのでしょうか。

荒谷 今まではそうでした。帝国海軍を使つての終戦工作は、当時OSSベルン支局長だった第五代CIA長官アレン・ダレスによって行われ、戦後も野村吉三郎元海軍大将などを使って海上自衛隊の前身である海上警備隊の創設に影響力を及ぼしました。また、米軍占領下に、対ソ戦略の為に日本再軍備は、外交問題評議会の提案で舵を切りました。このように、戦後の防衛は、最初からグローバリストの思惑によって進められてきました。

しかし、トランプ大統領の再選で日本も変われると

思っていた日本人は多かったようですが、全くそのような兆候は出ておりません。むしろ、米国から排除されたグローバル勢力が、日本において活動を活発化しています。ですから、実際には米国のディープ・ステートに従属していたのだということがわかってきました。だから、日本政府はトランプが大統領になってもトランプには従わず、依然としてディープ・ステートの言うがままに行動しています。そのよい例が、事実上のNATO加盟です。いま日本の防衛は、米国防府から離れて、グローバルリストの思惑のままに露対中戦争にまっしぐらです。

—— 自民党の中にもグローバルリストの力が強い状況があります。

荒谷 自民党も含め、戦後の日本の政党は基本的にはグローバルシステムの価値観に基づいて成立しています。サッチャー、レーガンが出てきたあたりから欧米は、全ての福祉政策を切り捨て、自由競争の勝者による管理社会へと動き出しました。日本でも中曽根内閣あたりから新自由主義政策が表に出始めてきました。橋本、小泉、安倍、菅、岸田と全てグローバルリストの

意向に従ってきました。

—— トランプ政権のやり方をうまく使って、日本は対米自立の方向に動けないのでしょうか。

荒谷 世界の様子を客観的に眺めて、グローバルズムから足を洗った方が良くだろうと考えて、意を決して動ける日本人がいれば、日本が自立に向かうステップにできると思いますが、いまの日本の外交はトランプ路線を批判しグローバルリストのフロント組織であるNATOに追従しています。

昨年（二〇二四年）の後半だけでも、7月には、航空自衛隊がフランス空軍と百里で、ドイツ空軍、スペイン空軍とは千歳で共同訓練をしています。8月には、海上自衛隊が、イタリア海軍、オランダ海軍・カナダ海軍、トルコ海軍と日本海で演習を実施しました。10月から11月にかけて、陸上自衛隊が日米+NATO軍オブザーバー共同演習を実施しました。さらに驚くべきことは、9月には、実際にロシア軍とウクライナ軍の交戦が行われている黒海において、英国海軍、ウクライナ海軍、米国海軍、ブルガリア海軍の合同MCM演習「シーブリーズ2024」に海上自衛隊も参加し、

ウクライナ海軍に機雷などの処理を指導しておりました。

ウクライナはロシアと交戦中の国であり、NATOはウクライナ紛争でロシアと事実上戦争しているのと同じ状況です。

—— 戦後の保守メディアをどう評価していますか。

荒谷 戦後の保守メディアと言われているものは、大方、戦後体制の保守の事です。日米安保体制以外の選択を持ち合わせていません。しかし、世界は今、米国のコミットメントが後退し、脱ドルへと進んでいます。にもかかわらず、日本のメディアはこのことを全く報道しないどころか冷戦の状況下でしか通用しないことしか述べられていません。

むすびの里による日本の再建

—— むすびの里を作られて、やはり自分たちの領域だけでも守っていくという必要を痛感されたということでしょうか。

荒谷 完全に占領された状態から日本が再度立ち直るためには、政体そのものを完全に変えなくてはいけません。それをどうという風にして進めるか模索する中で、

むすびの里の建設が最初のステップです。

戦後の傀儡政府は、時代の流れとともに消滅します。私たちは、そんなことに関わって無駄な時間を過ごすより、正しい日本の価値観を取り戻す共同体の再建に取り組もうとしています。日本に限らず、国家というものが存在するためには、国民が共通の価値観を持ちそれに基づいて行動できることが前提です。その意味で、現状の日本はもう国家として体をなしていません。戦後、日本国憲法で言われている国民の価値観は、伝統的日本の価値観と正反対の個人の自由、進歩主義という近代西欧で発明された価値観になっています。しかし、そのような価値観は、結局はマネーによる勝者の為の詭弁に過ぎないことが露呈し、コロナ以降は、人権を唱える国ほど人権が損なわれるという現象が確立しました。

「グレート・リセット」という世界同時革命を打ち出すと同時に、グローバル・ガバナンスが崩壊するというのは皮肉なものです。これも勝者必衰の理なのでしょう。

個人主義、自由主義、進歩主義は過去の遺物になり

ます。生き残れる国は、トランプ大統領やプーチン大統領が言うまでもなく、自国の伝統と文化を国民の価値観とする国だけなのです。

グローバリズムの暗黒の歴史の後に、日本が生き残る唯一の道は、日本人としての伝統文化に基づいた良心に立ち返ることです。

むすびの里や日本自治集団といった私がいま取り組んでいる活動は、グローバル時代から、また次の新しい世界へ移行する過程で、日本人の中に潜在的に眠る伝統的価値観を顕在化させようというものです。

私が考える日本人の伝統、文化、意識というのは生活様式ですから、文字だけでは本当にそこに価値観を見出すには至らないと思っています。だから、稲作をしたり、武道をしたり、共同生活をする体験の場が必要だと考えて今の活動をしています。

—— グローバリズムの敗退ということは、具体的にどこで感じていますか。

荒谷 グローバリズムが世界経済のガバナンスを行っていたのはドルが世界の国際貿易システム、金融システムを牛耳っていたからです。しかし、ワシントン・

リヤド密約、ペトロダラーシステムをサウジアラビアが破棄し、石油販売はドルだけではなく、人民元やルーブルなどでも可能となりました。そしてBRICSはドル以外の通貨での国際貿易を可能とし、金本位制に回帰することでドル支配体制を終わらせようとしており、その動きが実現しようとしています。

そして、ウクライナ戦争によって米軍は世界一強いということが幻想にすぎないと明らかになってしまいました。米軍は、冷戦終了後はテロ対策といった低強度紛争に特化した軍事思想、訓練、装備にシフトしました。民間人相手のハンティングのような事ばかりしてきた欧米兵士は、ロシアとともに戦えないということが明らかになっていました。

アメリカの武力はアメリカのためではなくて、グローバル経済の有効地域を広げるために使われてきたわけです。そしてサウジアラビアや日本等に自分でリスクをつくり安全保障を提供すると言ってお金と軍事力で管理してきたのですが、その化けの皮がはがれつつあるのです。

—— グローバリズムの崩壊について、啓蒙の段階か

ら実践の段階に至るには、どのようにしたらよいでしょうか。

荒谷 グローバリズムの敗退は決定的なのですが、米国から排除された彼らの最後の砦が、W H O、N A T O・E U等の国際機関そして日本になってきました。西欧諸国でも、脱グローバル化に向けて国民が動き出しています。そうすると日本だけが取り残されるだけでなく、グローバリズムとともに消滅することにもなりかねません。この数年が正念場になるのではないかと思います。執筆活動や情報発信は続けますが、それ

だけでは日本再建に間に合わない。早急に、体の底から日本再建に動き出せる人を一人でも多く送り出していかないとけないと思っています。

現状で、そうした日本人が大勢いるとは言いませんが、私が五十年前に国を憂い始めた頃の空気に比べると、今の国民意識は大きく変わってきていると思います。潜在意識の中に眠る日本人としての良心が復活するのは難しい事ではないと確信しております。

(聞き手・構成 小野耕資)

読んでおきたい日本の「宗教書」

日本人の生き方を考える12冊

小野耕資 著

(本誌副編集長)



『古事記』
『万葉集』

親鸞『歎異抄』

北畠親房『神皇正統記』

島崎藤村『夜明け前』

西郷隆盛『大西郷遺訓』

内村鑑三『代表的日本人』

新渡戸稲造『武士道』

岡倉天心『茶の本』

鈴木大拙『日本的霊性』

三島由紀夫『英霊の聲』

山本七平『「空気」の研究』

合同会社宗教問題

定価：1,210円(税込み)

江戸川区東葛西 5-13-1-713

FAX:03-6685-2612